ISSN　0582−4478

京都大学附属図書館報

静脩

2000年3月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 36, No. 4

「18世紀フランス建築・都市資料」平成10年度全国共同利用図書資料（大型コレクション）

京都大学名誉教授　加　藤　邦　男

平成10（1998）年度全国共同利用図書資料（大型コレクション）として購入され、京都大学附属図書館に収蔵された「18世紀フランス建築・都市資料」15タイトル全22冊は、平成２（1990）年度に同じく大型コレクションとして収蔵された「パリ市歴史・地誌関係資料コレクション」（144タイトル、273冊。『静脩』1991年７月、vol.28、No.1参照）を補完するものである。平成２年度のコレクションは、碩学として著名な歴史家Henri Sauval(1623-76)のHistoire et Recherches des Antiquités de la Ville de Paris, 3vols. 1724をはじめ、Jean Lebeuf, Germin Brice, Marcel Poëte, Jacques Hillairetらの著作に加えて、Jacques-Antoine Dulaureの著作や19世紀パリの大改造事業で有名なGeorges-Eugène Haussmannが主宰した叢書が含まれ、さらにPlan de Gomboustや現在でも盛んに引用されるPlan de Turgot（鳥瞰地図）その他のパリ市古地図帖が含まれて、充実したものであった。それは、フランスの歴史と文化が集約される中心地、驚くべき近代化の過程をたどったパリ市の、これまた著しい歴史的事象の探求、いわゆるギリシア語の語源的意味でのヒストリアを実証する膨大な資料的出版物の一端であった。今回購入されたコレクションの内容は、18世紀から20世紀初頭にかけて成立したパリ市及びその周辺部における記念建造物の記述が9タイトルと、17世紀フランス東北部の主要都市地図集（c.1667-68年刊）、16世紀の画家・彫刻家による遠近図法（1560年刊）、アネ城館の歴史的研究（1867年刊）、ヴェネッツィア、サン・マルコ広場の図集（1831年刊）、イギリス海峡を望むエディストン燈台建設記録（1913年刊）リヨンの建築家Gaspard André 作品集（1898年刊）の６タイトルとなっている。そのうち、大小２つのトリアノン宮を扱った図版集１タイトルと、A.-J. Gabrielがルイ15世を記念して計画したルイ15世広場（現コンコルド広場）とその北端を限って対称的に構成された海軍省建物を扱った図録１タイトルとは、すでに京都大学工学部建築系図書室所蔵のものと同本であり、とくに後者は、同所蔵の叢書『パリの古い邸館Les Vieux Hotels de Paris』（14冊）に含まれている１冊である。

つぎに書誌的に見ると、本コレクションは16世紀、18世紀の初版本計３タイトルを含んでいるが、出版年代別では、16世紀刊行本１タイトル、18世紀刊行本２タイトル、19世紀刊行本７タイトル、20世紀初頭刊行本４タイトル、そのほか、上に挙げた17世紀東北フランスの都市平面図および景観図を聚めた地図集（おそらく17世紀の版画集）１タイトルである。

本コレクションにおいてもっとも重要なのは、18世紀フランスの建築理論家で、『建築講義 Cours d'Architecture』（9 vol, 1771-77）を著したJacques-François Blondel（1705-74）のもう一つの主著、『フランス建築』、すなわち Architecture Françoise,　4vols. Paris, Jombert, 1752-74（初版、全４巻）であろう。副題には、「もっとも著名な建築家が建造したパリの教会堂、王家の邸宅、宮殿、もっとも重要視すべき邸館とその他の建造物、及びパリ周辺部、フランスの地方に建つ城館及び別荘」とある。J.-F. Blondelの主著『建築講義』は、学生向けの教本であったが、この『フランス建築』は、とくに公共建築事業に関わる当時の官吏、政治家たちへの啓蒙を目指したもので、取り上げた建造物の選択には建築に対する著者の見識が働いている。総数498図にのぼる所収の正確な大判図版はもっぱら現場実測に基づいて作図され、各建造物の記述と建築類型別にしたがう論考が付されている。18世紀のフランスでは、秩序の普遍性を可感の形において見いだす設計よりも、個人的感覚を満足させる恣意的、装飾的な建築の表現が、フランス特有のロココ様式として流布していた。J.-F. Blondelは、そうしたロマン主義的風潮に抵抗して、17世紀を通じていわばその弁証法的対極として確立してきたフランスの古典主義的伝統の、秩序を重んじる正統的な価値を見直して、それを個々の日常生活にそれぞれ似つかわしく適合した形のもとに表すことを、コンヴナンス convenance の原理として主張し、そうした姿勢で行った建築教育の実践を通じて国の内外に大きな影響を与えた建築理論家である。事実、1743年、芸術学校を自ら設立して、専門家のみならず一般人の教養をも視野に入れた公開講義を、年をおいて数回にわたり開催し、その成果が20年以上にわたって書き溜められた『建築講義』であった。またDiderot、D'Alembertの『百科全書』（1751-72）中の「建築」事項なども執筆している。J.-F. Blondelは、明晰、厳格、単純、壮大の秩序を特質として、普遍的レベルに到達したと自ら評価したフランス固有の優れた古典主義的建築作品の図版と記述を聚めて刊行することを企画するのである。それが『フランス建築』であった。それは、若い頃に関わった Jean Mariette, L'Architecture Française, 5vols. Paris, 1727-38の先例に発想を得たものであるが、しかもより発展させた企画であった。全８巻の出版が予定されたが、実際には、第４巻まで刊行された。第１巻（1752）は第１，第２書からなり、当時流布していた種々の様式を批判的に記述した建築概論から始めて、フォブール・サン・ジェルマン地区の主要建造物を扱い、そのなかでもとくに、Liberal Bruant、J.-H. Mansartらの王立傷兵院（オテル・ロワイヤル・デザンヴァリド）が注目される。第２巻（1752）は第３、第４書からなり、リュクサンブール地区とシテ島、サン・タントワーヌおよびマレ地区の主要建造物を扱い、なかでもLouis Le Vauのコレージュ・デ・カトル＝ナシオン(現フランス学士院建物）が注目される。第３巻（1754）は第５書でなり、サン・トノレ地区の主要建造物が扱われ、自らの実測に基づくサン・ドニ記念門（1671、建築家François Blondel）及びこの門の建築家の弟子Pierre Bulletの手になり（1674年建造）、J.-F. Blondel自身もその装飾に関わったサン・マルタン記念門（1745年装飾）の図面収録が注目される。第４巻（1756）は第６，第７書でなり、ル・ルーヴル及びチュイルリーの宮殿とヴェルサイユ宮殿が扱われている。以上の各巻には挿入すべき約50から140余りの図版のそれぞれに関して、装丁者への丁寧な指示一覧が付されている。第５巻以降に予定されていた未刊行の巻

には、ヴェルサイユ庭園中に建設されたトリアノン（1687年改修のJ.-H. Mansart のグラン・トリアノン邸館）など、王家の邸館、造園術、内装装飾、建築のオーダー等の記述が収録されるはずであった。

J.-F. Blondelを18世紀フランス古典主義の理論家とすれば、権威ある王立アカデミー会長の要職についたAnge-Jacques Gabriel（1698-1782）は、実践家としてJ.-F. Blondelと一対をなす建築家であった。本コレクションでは、18世紀の古典主義の理念をヴェルサイユ庭園中にもっとも純粋な形に実施したGabrielの小トリアノン宮殿が、J.-H. Mansartの大トリアノン宮殿と関連させて収録された図録４タイトル（19世紀末から20世紀初年の刊行本）、及び大記念碑的建造物である海軍省の外部、内部のデザイン及び前面のルイ15世広場（現コンコルド広場）の図録（1922年刊）も注目される。Gabrielは、厳格な古典主義的理念とプライバシー、快適性、新奇性の愉しみなどを求めた当時のブルジョワたちの趣味を両立させる柔軟かつ洗練された構成力を有して成功した建築家であった。建築物の形姿を限る輪郭の厳格さ、形態構成の揺るぎなさ、装飾を制限した単純な造形の強さによって、当時流行していたフランス建築の軽薄さを是正しようと努めて、成功したのであった。J.-F. Blondelと同様に17世紀の正統派の建築家を自らの模範としたGabrielは、保守的であると同時に、近代を予告する簡潔な合理的形態を産み出し、その徹底した前衛性によって、18世紀フランスの新古典主義者のなかでももっとも傑出した建築家の一人と言える。

パリ市庁舎に関する興味深い著書２タイトルが見られる。パリ市庁舎は14世紀末以来セーヌ川に向かって傾斜した右岸のグレーヴ広場に面して建設され、今日までその位置を変えることはなかったが、時代の流れのなかで、市庁舎そのものは、1830年頃までに、その周辺に建て込んできた教会、病院などの諸施設を整理し、さらにG.-E. Haussmannのパリ大改造事業によって一街区として独立した４立面を有する記念碑的建造物となった。現在の市庁舎は、1871年のパリ・コミューヌ事件によって焼失した後、一部壁面保存をしながら1882年に改築されたものである。R. Pitrou, Recueil de Differents Projets d'Architecture et Autres concernant la Construction des Ponts, 1756（大判図版35図を収録）は、ルイ15世の時代、シテ島のノートル＝ダム大聖堂北側に、都市整備計画の一環として、古典主義的様式の庁舎を建設するための新築計画案を収録している。1770年には現在地で現庁舎の中核部を為す部分が完成するのであるが、重要な歴史的ランドマークであった市庁舎がこの啓蒙主義の時代に、新たに古典主義の様式と思想のもとに提案されたのが見られて、興味深い。また計画全体にわたって、当時の発達した土木建築の技術的な取り扱い方法もうかがえて、注目される。これに対して、M. Vachon, Le Nouvel Hotel de Ville de Paris, 1872-1900,（1900）では、現在に伝わる市庁舎の1882年改築の経過を詳細に紹介していて、当時の文化遺産の認識とその取り扱い方を知ることができるのである。

S. de P. de Beaulieu（?-1674）は、軍事作戦に必要な精密地図の制作者として知られる。De Beaulieuの『17世紀フランス東北部の主要都市地図集』は、アルトワ、フランドル、リュクセンブルグその他の地方が、フランス国王の領地として獲得されたことを記念して成立した。それは、1667年頃のこの地域における諸都市を著した地図集10巻を３冊にまとめて帙に納めたもので、都市の平面図、城塞外郭図、市外からの眺望景観図など210点からなっている。形式的にはこれは、当時に出版された種々の都市景観図などの一種であるが、欠落図があるものの、良好な状態を保つ、まとまった17世紀の古版地図集として貴重である。

いままで言及しなかったJehan Cousin（c.1490-c.1560）の『透視図法』（1560）、Antonio Quadri（1777-1845）の『ヴェネツィア

のサン・マルコ広場』(1831)、その他の資料にも興味の点は尽きないが、総じて言えば、平成２年度の大型コレクションに比べて、量質ともにささやかではあるものの、とくにフランスに伝統する18世紀の新古典主義的、あるいはより一般的にフランス建築を特色づける、あの人間性に立脚した柔軟な理性の精髄を具体的に捉えて、パリ市及びその周辺環境の建築的な姿を示す資料として、平成２年度の大型コレクションを補完すると言えると思うのである。

（かとう　くにお）

図版：

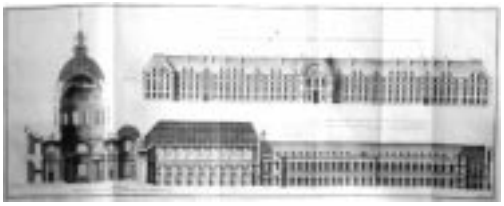
図１．

『17世紀フランス東北部の主要都市地図集』所収のリュクセンブルグの平面図と景観図、c.1667

Le Duché de Luxembourg in Provences eschûes à la Reine Tres-Chrétienne Marie Therese infante d'Espagne, Paris, c. 1667. S. de P. BEAULIEUX, Les Plans et profils ... du Duché de Luxembourg.

この景観図が示す様相は、今日のルクセンブルグ旧市街にその趣が残されている。山岳地帯の自然のなかに建設された要塞都市の様子が克明に描かれている。都市のシルエットが盛り上がり、その頂上をなす高い塔屋は、ノートル＝ダム大聖堂とおもわれる。丘陵の麓を巡る都市壁の外を蛇行する水路に沿って画面の左下方に、Alsitz Rの記入が見えるが、これは、現在のアルゼット川に当たる。平面図では、当時盛んに計画、建設された要塞都市に共通な、突起を有する星形の都市平面が描かれている。周りを取り囲む丘陵群や都市を迂回して蛇行する川などに、自然の微地形を巧みに利用しながら全体として調和した環境の都市の姿がうかがえる。

図２．



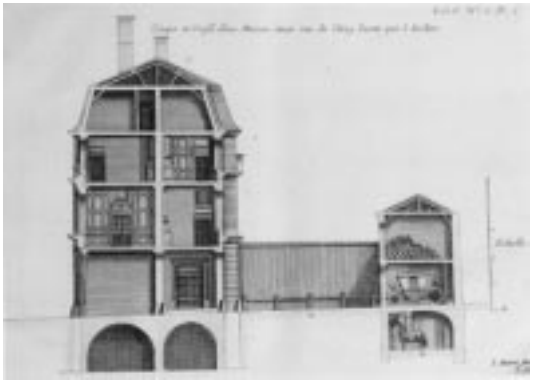
J.-F.ブロンデル『フランス建築』第I巻、1752、第２書、第１章所収のパリの「王立傷兵院（オテル・ロワイヤル・デザンヴァリド）」北側主立面図（上図）および南北縦軸方向断面図（下図）

L'Hôtel Royal des Invalides in Jacques-François BLONDEL, Architecture Françoise, tome I, 1752, Livre second, Chapitre 1er.

王立傷兵院（オテル・ロワイヤル・デザンヴァリド）は、ルイ14世の命を受けリベラル・ブリュアンLiberal Bruant(1635-97)が設計した退役傷痍軍人の収容施設で、広大な広場を前面に介してセーヌ川と直交するパリ市の都市軸の一つを決定する建築複合体である。この主立面の中央部には、イオニア式オーダーによる左右二組の壁付き双子柱の上に円弧状のアーチを戴くポルタイユ風の楼門が張り出し、左右両端部に翼屋（パヴィリオン）を具え、17世紀以来の典型的な宮殿形式を横長に構成している。本書の記述では、中央突出部の高さが78 ピエ（約25メートル）であるのに対して、立面の全長は101 toises

（約197メートル）に及ぶ。縦軸断面図は、上記の北側正面楼門から南端にジュール＝アルドアン・マンサールJ.-H. Mansartの傑作、サン＝ルイ礼拝堂付属のドーム・デ・ザンヴァリッドに至る断面構成を示す。このドームの断面図には三層構造が明瞭に見て取れ、興味深い。ここには後に、ヴィスコンティLudovico-Tullio-Joachim Visconti (1791-1853)の設計によってナポレオンの墓廟となったことはよく知られている。

図３．



J.-F.ブロンデル『フランス建築』第III巻、1754、第５書、第５章所収のクレリーCléry通り、エストラードEstrades伯爵夫人邸断面図
Coupe et Profil d'une Maison située rue de Clery, bastie par I. Richer in Jeacques-François BLONDEL, Architecture Françoise, tome III, 175f4, Livre 5, Chpitre 5.

本書は、この邸館がクレリーCléry通りに、建築家ジャン・リシェールJean Richerの設計によって17世紀末に建設されたと記している。断面図では、前面街路に面する主屋と背後に中庭をおいて対峙する倉庫が描かれている。母屋の簡素な内部装飾と倉庫内に納められた四輪馬車と地下の馬が目を引く。三角形の敷地に計画された平面図から判断すると、この邸館は、クレリーCléry通りとグロ＝シュネGros-Chenet通り（後者は現在のサンチエSentier通りに併合されている）とが交差する角地に位置する。クレリー通りは、現在のアブキールAboukir通りとそれに続くル・マイユLe Mail通りと平行に並んでいる。これらの通りは、サン＝ドニ門とヴィクトワールVictoine広場をつないでいる。いずれも、シャルル５世市壁のサン＝ドニ門以西が1634年から解体されてルイ13世の市壁へと拡張されるのに伴い、解体された市壁跡地に開設された街路である。これらの街路に沿って土地区画分割が規則正しく行われて、多くの邸館が建設された。1991年、京都大学附属図書館に収蔵された『パリ市歴史・地誌関係資料コレクション』中のPlan de Turgot(1734)に、この開発後の様子が見事に描き出されている。このエストラード伯爵夫人邸も、そうした都市開発の一環として建設されたものであろう。それは、セーヌ県知事オスマンGeorges-Eugène Haussemann(1809-91)のパリ改造事業の一つである1896年のレオミュールRéaumur通り開設の結果、消滅した。シャルル５世の市壁解体からオスマンの都市改造事業まで存続したパリの貴族住宅の詳細を示す注目すべき資料である。

図４．

シテ島に計画された市役所Hotel de Ville全体配置図および庁舎前庭（アヴァン・クール）に面する正面立面図・翼

棟並びに地下船着き場断面図。
Plan de L'Isle du Palais ὸu l'on voit la Disposition Générale & Élévation de l'Hôtel de Ville du Côté de la Place avec la coupe d'une aile et du port couvert in R. Pitrou, Recuil de Différents Projets d'Architecture de Charpente et Autres Concernant la Construction des Ponts, Paris, chez la Veive de l'Auteur, 1756.

本図は、フランス土木局の監視官として知られる建築技師ピトルーR. Pitrouが実施ならびに計画したプロジェクトを集成した３部構成本中の第１部に収録されている。シテ島（本文中ではIsle du Palaisと呼ばれている）において、王の記念像を中心にして計画された円形広場と前庭（アヴァン・クール）を介してそれにつながる市庁舎の計画である。当時のシテ島では、16世紀から17世紀以来、整備が行われたポン・ヌフ記念橋や裁判所がある西部に比べて東部では、劣悪な住居群、四輪車が回転することが困難な幅員５～６ピエ（２メートル弱）の街路、感謝式（テデウム）などの祭礼のたびに群衆で溢れかえる大聖堂前など、不良な都市環境問題が残されていた。ピトルーは、こうしたシテ島の混雑した高密街区の状況を改善し、大聖堂前面広場（パルヴィ）を設け、セーヌ川の護岸、船着き場を整備してこの地区の商業発展にも寄与する、壮大な国王の記念計画案を提案している。計画図には、円形の王の広場、市庁舎に加えて、新しい河岸（ケー）や橋梁などが見られる。とりわけ、断面図に見られる地下船着き場port couvertの提案は、興味深い。

図５．

パリ市庁舎の旧正面立面図中央部分
La Façade Centrale de l'Ancien Hôtel de Ville in Marius VACHON, Le Nouvel Hôtel de Ville de Paris, 1872-1900, Édition du Conseil municipal, 1900.

18世紀以来整備拡充されてきたフランス近代化の牙城パリ市庁舎はネオ・ルネッサンス様式の建築物として1870年までには完成していたが、1871年、パリ・コミューヌの事件によって焼失した。市庁舎再建に際して、1872年６月から７月に開催の市議会で、旧庁舎の正面立面の完全な復元が満場一致で議決されたと本書は記している。新庁舎の設計は、バリューThéodore Ballu、デペルトPierre-Joseph-Édouard Déperthes、フォルミジェJean-Camille Formigéの３人の建築家に委託された。しかし、復元した旧庁舎正面を中央突出部にもつ再建された新庁舎立面には、以前よりも数多くの彫像を壁面や屋根の棟など随所に配置して、建築構成の骨組みが曖昧になってしまっている。本図は、フランス・ルネッサンスの香りが漂う再建直前の旧い立面図である。本書中には再建後の立面写真が掲載されているので、比較すると興味深い。

図６．

18世紀における小トリアノン宮殿と庭園の全体配置図（バルタールBaltardの版画による）
Plan Général des Constructions et des Jardins à la fin du XVIIIe siècle, d'après la gravure de BALTAR in Léon DESHAIRES, Le Grand Triannon & Le Petit Trianon、Librairie des Arts Décoratifs, 2 vols.(1910年頃)

本書は、大トリアノン宮殿Le Grand Trianonと

小トリアノン宮殿の記述とが分冊となって構成されている。本図は小トリアノン宮殿の冊子に収めらている。この図の右下に添えられているガブリエルAnge-Jacques Gabriel設計の宮殿平面図は端正な正方形をなし、イタリア・ルネッサンスの建築家パッラディオAndrea Palladio（1508-80）のロトンダと呼ばれるカプラ邸villa Capraを思わせ、この宮殿の完結的な外観の力強い直線的なデザインは、ガブリエルの完成した古典主義的傾向を表している。ジュール＝アルドアン・マンサール J.-H. Mansart(1646-1708)の設計になる、ルイ14世時代のフランス・バロックの大トリアノン宮殿の建築と好対照をなす。

図７．

1791年頃のルイ15世広場の透視図（タラヴァルTaravalの版画による）

Vue Perspective de la Place Louis XV, vers 1979, d'après la gravure de Taraval in Le Ministère de la Marine. Notice historique et descriptive par J. Vacquier. Paris, chez F. Contet, 1922 dans la collection de Les Vieux Hôtels de Paris.

ルイ15世広場（現在のコンコルド広場）の競技設計を勝ち取った建築家ガブリエルA.-J. Gabriel設計により、石造欄干で取り囲み堀を巡らせた八角形の広場が建設された（1755-75）。広場の八つの隅には巨大な石造の台座上に彫像が据えられ、広場中央にはルイ15世の騎馬像が置かれた。その後、掘では祝祭の花火大会で群衆事故が起こり問題となった。大革命時には王の騎馬像が引き抜かれ、革命広場となって国王の処刑場と化し、希望の意を込めてコンコルド広場と命名され現在に至っている。図版中央、騎馬像の後方にはガブリエル設計による左右対称に配置された一対の典型的な古典主義の建造物が見える。それはペローClaude Perrault (1613-88)の設計と言われるルーヴル宮殿東正面の構成を意識したものであるが、広場中心に据えられた王の騎馬像の背後に、双子の宮殿建築の中間を貫通するロワイヤル通りの彼方は空白のままである。やがて間もなくそこにヴィニョンPierre Alexandre Vignon(1765-1828)が設計する古代神殿風のマドレーヌ教会堂正面(1806-42）が焦点を決めることになる。双子の宮殿の向かって右翼棟は「国有備品保管建物Le Garde-Meuble de la Couronne」として建設され、大革命時には略奪され、後に海軍省Le Ministère de la Marine庁舎となるのである。

追記：本稿を草するにあたって、資料の精査および図版の選択、解説のための調査には、松本　裕氏（京都大学大学院工学研究科博士後期課程在学院生、大阪産業大学講師）の手を煩わせた。